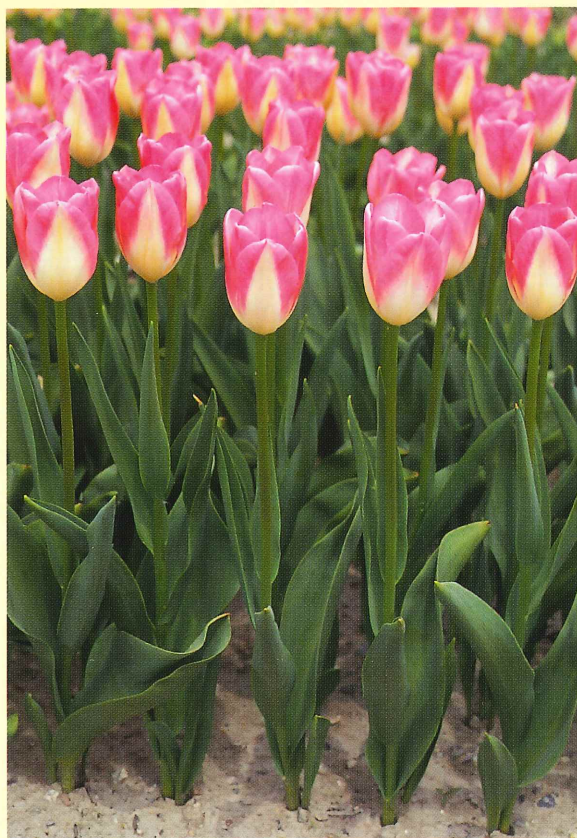


チューリップ 四季だより



▲農林17号「白雲」
オランダに品種登録申請中



▲農林16号「初桜」
オランダに品種登録申請中

渡来しておよそ一五〇年、 日本の人々の目に写るチューリップは

法政大学非常勤講師 今西弘子



▲過酷な自然環境に耐えてたくましく咲く原産地のチューリップ。

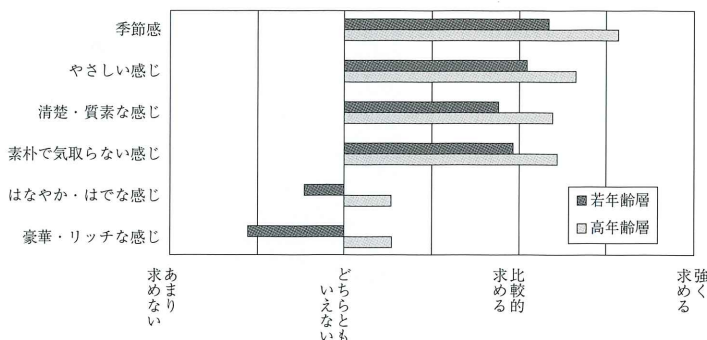
チューリップが最初に園芸植物として栽培されたトルコでは、神の花、神の加護と幸運を招く花として衣服、鎧、軍旗のモチーフにされました。それはさらにエスカレートしてチューリップがあれば死後の世界も幸せが保証されると信じられる特別扱いの花になりました。また一六世紀ヨーロッパにもたらされたチューリップは、オランダをはじめ各地で人々を狂わせる狂騒事件（チューリップ狂時代）を起こすほどの花であったことはあまりにも有名です。

新しい時代の足音が聞こえ始めようとする文久三年（一八六三年）日本に

渡来したチューリップは当時の人々にどのような受け取られたのでしょうか。江戸末期から明治にかけてはさまざまな種類の外国の花が入ってきました。ダリアは現在の価格に換算すると一球四〜五万円を取り引きされるほどの流行となり、ニオイスマイレもちよつとしたブームとなったと記録されています。けれどもチューリップはというと、当初とくに流行することもなく、単に珍しい舶来の花として一部の富裕な階級の人々にだけ観賞される、どちらかというとマイナーな花であったようです。他の主な洋花に比べると導入の時期が遅いことや、当時盛んに描かれた舶来の花の図譜などにもチューリップは見あたらないことなどからもその注目度の低さを推測することができます。

もともと豊かな緑と花々に恵まれ、栽培、園芸化された多くの花もあった日本では、外来の花は特別扱いされることもなく、多くは美しい花の一つとして比較的冷静に受け止めていた様子が見えられます。

中でもチューリップがあまり注目されなかったのはなぜでしょうか。その理由の一つは、当時の日本人の花に対する見方や美意識に合わなかったのではないかと推測されることです。「花と人のかかわりの調査」を繰り返して分かってきたことですが、人々が花に強くイメージするのが美しいよりも、やすらぎと自然、求める感じはこう華



花に求めるものとその度合い
若年齢層（18〜22才、140名）と高年齢層（60〜69才、52名）との比較
実施：1989年
5段階評定の尺度には、2…強く求める、1…比較的求める
0…どちらともいえない、-1…あまり求めない、-2…まったく求めない、と表示

さ、はなやかさよりも季節感と親しみ感、懐かしさ感です。今私たちがチューリップに強い春のイメージを持ち、幼いときから親しんだという親しみや、なつかしさがもたらすやすらぎを感じます。だからチューリップが好きなのだといえるでしょう。しかし渡来当時の人々の見たチューリップにはこれがないのは当然です。

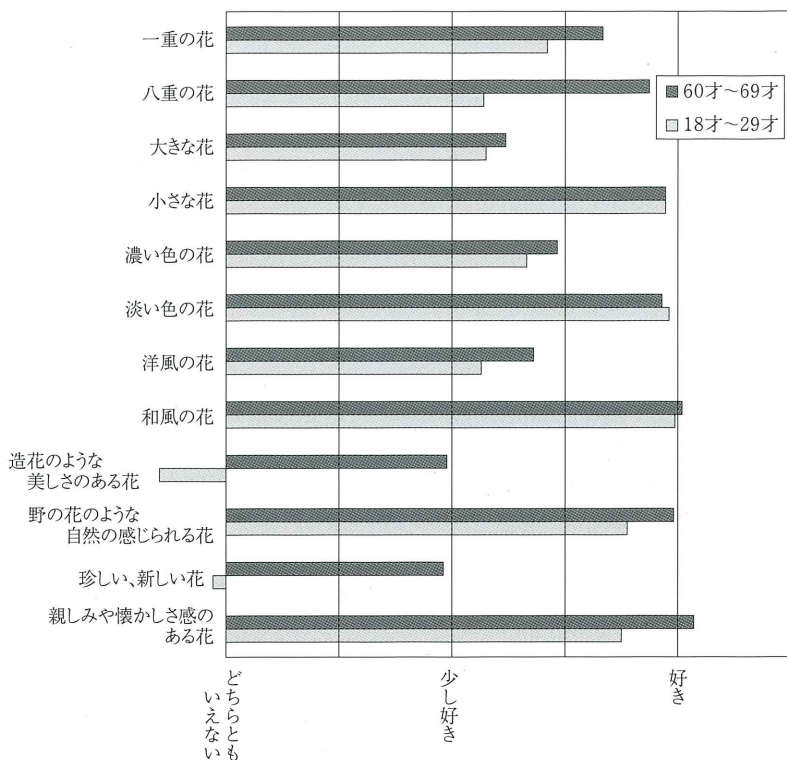
古くから日本の祖先たちはその季節を待ちわびて咲くそれぞれの季節の花をこよなく愛してきました。しかもその花の多くは日本人好みの、淡い色の、小さく清楚でやさしい花、自己主張をしないでひっそりと咲くような花だったと思われまふ。そこにとつぜん現れたと云ってよい洋花の一つがチューリップです。その鮮やかすぎる色、見た

こともない奇妙な形の花は、当時の人々の目にはかなり異様なものに写ったに違いありません。花びらが薄く柔らかでなかったことも素直に受け入れられなかった理由と考えられます。

これは季節ごとにたくさんさんの花の種類や量に恵まれた、世界的にもまれな自然環境の日本に住む人にだけ当てはまることも知れませんが、その花をみて感動し、やすらぎを感じて好きになるためにはいつかどこかで見たことがある（実際に見ていなくても）と感じる「既視感」のあることが大切なようです。明治時代にニオイスマイレやカーネーションが比較的すんなりと受け入れられたのも、長く祖先が農耕を営む周辺にあった自生のスマイレやナデシコの姿との共通点にふとやすらぎと親しみを感じたからでしょう。まったく見たこともない花は、好奇心から一時的に惹かれても本当に好きになって受け入れることができるまでには時間が必要のようです。

明治前後に渡来した他の洋花に比べてチューリップの普及が遅れたのも一つの大きな理由として、原産地の多くが夏冷涼乾燥・冬湿潤の地中海性気候であるのに、日本の太平洋側は正反対の夏高温湿潤・冬乾燥でウィルス病の発生も多く、次の年には正常に開花しにくいことを付け加えて置かなければならないでしょう。

チューリップが広く知られるようになったのは昭和になってからと考えた方がよさそうです。それも、大正生まれの私の母が子供の頃「咲いた咲いた」の歌は知っていたけれど実物の花を見たのはかなり後のような気がすると云っていることから、おそらくはじめて花を見るのは後からというかたちで広



花のタイプによる好まれる度合い—高年齢層と若年齢層の比較—

(7段階尺度評定平均値)

対象：18～29才 159名、60～69才 202名
実施：1997年

7段階尺度の各尺度には 3…とても好き、2…好き、1…少し好き、
0…どちらともいえない、-1…あまり好きではない、-2…好きではない
-3…きらい と表示した

まっぴいって思われます。現在もスズランやエーデルワイスなどはほとんどの人が似たような出会い方をしていないのではないのでしょうか。
広く知られるようになってからも、原色で単純な形のチューリップの花は、童謡に歌われたことからもわかるように日本では子供向きの花とみられ、長く培われてきた繊細で深い、花への美意識を持つ大人の観賞にはややもの足りない花という位置に甘んじていました。
それが大きく変わるきっかけとなったのが一九九〇年に大阪鶴見で開催された「国際花と緑の博覧会」です。これを契機に自由にオランダから球根が輸入できるようになりました。それまで日本では見ることの出来なかった淡い

花色、中間色の花、柔らかそうに見えるフリルや切れ込みのある花びら、自由に反り返る花びら、小ぶりの花などなど。そのバラエティの豊富さが現代の日本人を夢中にさせたのです。なぜこのように人気が急上昇したのかもうおわかりの人もいます。それは季節感に溢れ、しかもこれ以上ないほどの既視感、親しみ感、懐かしさ感じっぱいという下地があったからこそです。そのチューリップがよそおひもあらたな姿で目の前に登場したからです。一つの花が脚光を浴びるためのこれ以上の舞台設定はありませんで爆発的であつたために、多量にも急でも長期間チューリップが人々の目にさらされることになりました。その結果、

熱しやすく冷めやすい日本人の特性も手伝って人々の関心も意外に早く薄れていきました。花がその価値を維持するには希少性(時間的にも量的にも)を保ち、いつも憧れの存在であることが不可欠といえます。

いま人々はどんなチューリップが好きで、どんな花があらわれるのを望んでいるのでしょうか。みんなの持つチューリップというイメージは想像以上に固定的で、大き過ぎる変化には必ず拒否的な反応をします。あるお母さんが小さな子供とチューリップの球根を植えて春を楽しみにしていました。八重咲きのチューリップが咲いたのをみて子供が「これはチューリップじゃない」といつて泣きだしたという話を聞いたことがあります。大人も子供もいつも同じ花では少しつまらない、けれども変わりすぎた花には期待を裏切られたという感じを持つようです。日本に住む多くの人は、やすらぎをもたらし既視感に、適度な新鮮味がプラスされた花に感動し、最高の快感を抱くようです。

鶴見の花博以降、私たちの身近な生活空間にはたくさんの種類と量の花が見られるようになりました。そのほとんどは品種改良が進んで鮮やかで美しく、どの花もバラやダリアと見まがうほどのです。花の少ない時代にはどんな花でも喜ばれますが、花が多くなつて選択の幅が広くなると人々の花に対する目も肥えて「その花らしさ」の価値が高まり、それが求められるようになります。その点チューリップは花の形、色、白いベールをまとったような葉の独特のグリーン、長い茎の自由なラインなどどれをとっても数ある花の中でも際立つ特徴をそなえています。このこともチューリップがことのほか好まれる理由の一つに入れることができるでしょう。

響でサクラの開花が年ごとに早まり、入学式の花であることが難しくなりそうな気配です。このときポストサクラに最適なのが、明るくはなやかでありながら野の花のやさしさ、季節感、親しみ感じっぱいのチューリップでしょう。切り花も花壇もその日に合わせて対応できることも大きな強みです。入学、就職などの新しい季節、新しい環境を祝い、飾る花の主役となつて、家族や仲間とのうれしくて気持ちが高ぶった思い出とともにいつまでも一人一人の心の中に咲き続けるのにいちばんふさわしい花はチューリップではないでしょうか。

【略歴】

しまくく さん

一九六三年千葉大学園芸学部卒業。一九六五年京都大学大学院農学研究科修士課程農学専攻修了。一九七八～一九九〇年大阪府立大学総合科学部聴講生・研究生として心理学関係の単位取得。一九八五年頃から花と人とのかわりに関する調査・研究を開始し、一九九一年京都大学より農学博士の学位を授与される。「花と人とのかわり」をテーマに、十余年にわたつて花と園芸と心理学の境界領域の調査研究に従事。消費者の心理面からの花の消費に関するアンケート調査も数多く実施。専門は花の文化論、花の文化史、園芸心理学。

大阪テクノ・ホルティ園芸専門学校客員教授、帝塚山学院大学非常勤講師を経て、現在法政大学非常勤講師、東京農業大学非常勤講師、東京テクノ・ホルティ園芸専門学校客員教授、日本ガーデニング専門専門学校講師、JFTD学園日本フラワーカレッジ講師。

著書に「花と人間の新しい関係を求める―花の未来―(農文協)」、「花の名随筆・十二月の花」(作品社) 共著、「農業技術体系 花卉編」(農文協) 共著など。

「富山生まれの品種」

「初桜」と「白雲」

(農林 16号)

(農林 17号)

オランダでの品種登録へ」

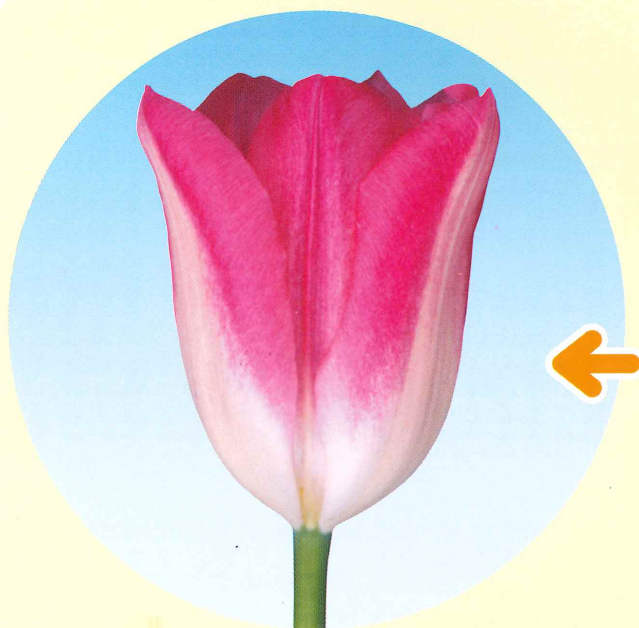
富山県農業技術センター野菜花き試験場で育成され、農林登録された品種はこれまでに二十四品種あります。その中でオランダでも品種登録されているのは、昭和五十七年に農林登録された「黄小町」だけです。

一昨年にオランダで開催された見本市で高い評価を受けた「初桜（はつざくら）」と「白雲（はくうん）」の二品種が、現在、オランダにおいて品種登録の申請を行っています。

昭和六十三年に隔離検疫制度が緩和され、事実上、球根の輸入が自由化されると、円高も重なって海外からの球根が多量に入ってきました。現在では、国内市場でもオランダ産の球根が約七割を占めるようになっています。

このため、富山県は独自の品種開

発に力を入れ、オランダ産にはない特性を持つ新品種の育成に力を注いでいます。この「初桜」と「白雲」は共にダーウィンハイブリッド群には珍しい花色で、オランダで品種登録が行われれば生産や販売の規制を行うことが可能となり、許諾使用料収入も見込むことができます。さらに、海外市場で有利となることから、生産者の励みにもなるのではと期待されています。



▲「ピューリシマ」



▲「カメリア」

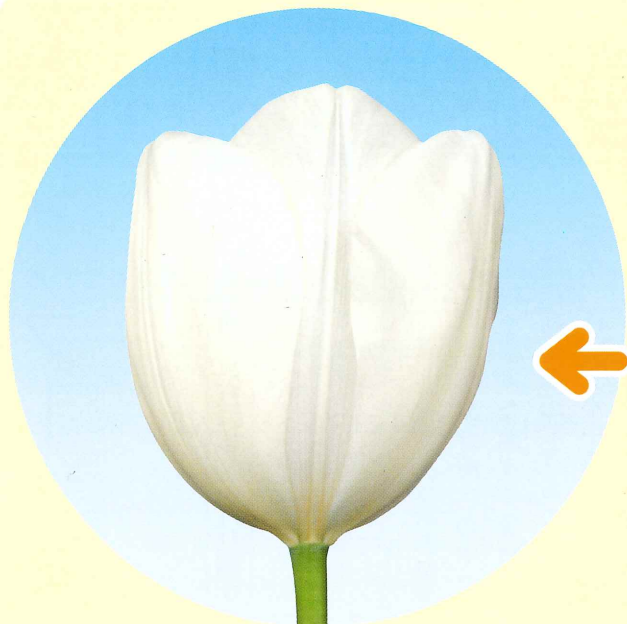
×



初桜 (はつざくら)

ダーウィンハイブリッド群

1966年に「カメリア」と「ピューリシマ」を交雑。白と桃色の覆輪でダーウィンハイブリッド群には見られない花色を持ち、大輪の花をつける。草姿は大型で花壇植え、切り花とも適している。1991年に農林登録された。



▲ 'ピューリシマ'



▲ 'マウントエレバス'

×



● 白 雲 (はくうん)

1966年に「マウントエレバス」と「ピューリシマ」を交雑。白色の大輪の花をつけ、草姿は大型。花壇植え、切り花とも適している。1991年に農林登録された。

第九回国際花卉球根シンポジウム開催される

四季だより第二十八号でもご紹介しましたが、去る、四月十九日から二十二日までの四日間、新潟市の朱鷺メッセで第九回国際花卉球根シンポジウムが開催されました。アジアで初めて、日本で開催された今回のシンポジウムには、海外十六カ国二百十五名の参加があり、花卉球根のあらゆる分野にわたり、百四十二件の口頭あるいはポスターによる研究発表が盛況に行われました。



▲ポスターによる研究発表

初日は、開会式の後、オランダ国際球根センターのJ・C・M・Buschman氏、静岡大学教授の太

川清氏、京都大学名誉教授の河野昭一氏による基調講演が行われました。

午後から行われた口頭発表では暖地における花卉球根生産や環境問題に対する情報交換の基盤形成、土壌伝搬病の防除など各々の国が花卉球根生産に抱える問題、課題に対する研究とその成果が期間中に五十件発

表されました。それ以外にもポスターによる発表が九十二点展示されました。

また、

期間中の視察旅行では新潟

県の園芸研究センターや北蒲原郡中条町のチューリップフェスティバルなどを訪問したほか、シンポジウム後の二十三日には、富山県の野菜花き試験場やとなみチューリップフェア、チューリップ四季彩館を十二カ国三十九名が現地視察しました。



▲野菜花き試験場



▲となみチューリップフェア

『チューリップ・インスプレー・ジョンの泉の四〇〇年』

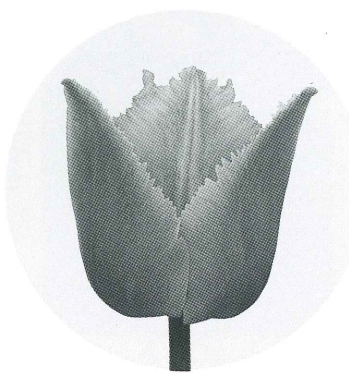
〈最終回〉

© De HED (オランダ・リッゼ市チューリップ博物館発行) より

第八期 一九五〇年～一九九四年

(前号のつづき)

オランダでは促成栽培用の球根販売量が増加していきました。新しい商業技術の発達により「冷凍倉庫」の中で、球根を様々な温度で調整し、開花期を調節できるようになり、ほぼ一年中栽培が可能となりましたが、この技術は生育状況が心配されていました。一九七〇年代に入ると新しい動きが起きます。品種登録制度の始まりです。市場に回る新品种が栽培される際の課税は、生産者によって以後二十一年間にその品種が栽培される総額から算出されます。



「ブルー・ヘロン」
(フリンジ咲き)

一方、七〇年代半ばのエネルギー危機によって花卉産業界では生産者がエネルギーの

(つまりこの税は、ライン川流域の生産者がただけ生産するにかかっていた。)

この品種登録制度で勇気付けられた品種改良は、再び注目され盛んに行われるようになり、八〇年代には販売用のチューリップ球根を構成する品種が再び変化します。「ダーウィン・ハイブリッド群」に変わり、「ビリデ咲き」や「ユリ咲き」、「パロット咲き」といった変わり咲きのチューリップが代投し始め、チューリップの品種改良の勢いは、しばらく保証されました。

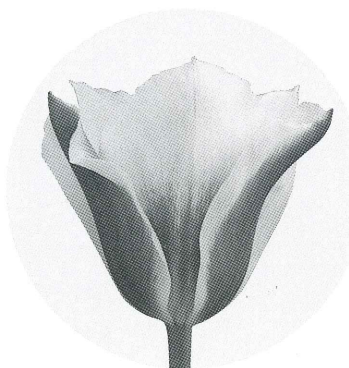


「スバル」
(ユリ咲き)

節約を要求され、チューリップ産業界は再び難題に立ち向かうことになりました。

さらに、八〇年代の第一次産業に起きた環境危機で栽培方法の再検討が必要となり、研究開発と、試験栽培が盛んに行われました。また、新しい品種を栽培する場合、政府に申請する義務が課せられました。その後、チューリップはより優れたものとなりました。

さらに、現在も品種改良への挑戦は続いています。新しい病気にかかりにくい品種を目指した交配は、もしかすると、四百年前のウィルス病に



「スプリンググリーン」
(ビリデフローラ群)

かかったチューリップの絵のように美しく、しかもとても丈夫な品種となるかもしれません。

そして、このような新しい品種の育成で、チューリップ産業界はさらに発展し、日本市場への門戸が大きく開かれることが期待されます。と同時に、かつてのチューリップ狂時代を経た西ヨーロッパに近い、西アジアや中国にも市場のチャンスが巡ってくることでしょう。

五世紀にすでにアジアにあったチューリップが、人々の手を介して、再びアジアへ戻ってくることになるです。(完)



「ピンクレディー」
(パロット咲き)



『チューリップ歴史年表』

紀元前 1000年	この頃からチューリップがトルコで栽培されていたという記録が残っている。
1100年	チューリップがイタリア語聖書の頭文字に使われる。
12世紀	ベルシャの詩人、数学者オマル・ハイヤム、チューリップについての詩を創作。
13世紀	詩人ルミ、数多くの詩歌でチューリップを称える。
1520～ 1566年	スレイマン2世治下のトルコで、チューリップ時代が出現。
1557年	チューリップの西欧初のデッサンが登場。
1561年	チューリップが描かれた最初の書籍(C・ゲスナー)が刊行される。
1568年	チューリップが描かれた書籍(R・ドドエンスの「植物標本集」)がオランダで初めて刊行される。
1578年	チューリップがイギリスに登場する。
1581年	植物学者マティア・ド・ロベル、その著書で41種類のチューリップを描く。
1593年	カルロス・クルシウス、オランダ・ライデンの植物園に初のチューリップを植える。
1594年	オランダで第1次のチューリップ・ブーム。
1598年	チューリップがフランスに登場する。
1600年～ 1650年	チューリップ、高級庭園植物として、庭園の最重要エリアに植えられるようになる。
1600年	ハーレムの南、特にワーヘン街道、クライネ・ハウト街道沿いにチューリップの栽培農園が初めて誕生。これらの独占事業はその後、150年にわたりその地位を保つ。
1612年	エマヌエル・スウェルツ、最初の商用カタログを発行。そのなかにチューリップを載せる。
1610～ 1637年	チューリップの球根が活発に売買されるようになり、激しいチューリップ投機が発生。価格は1623年から1637年にかけて急騰し、例えば、センペルアウグストゥスは球根1個が1624年には1,200フロリンだったが、翌1625年には3,000フロリン、1633年には5,000フロリン、1637年にはなんと30,000フロリンまで急騰した。ちなみに、アムステルダム運河沿いの家は当時10,000フロリンほどで買うことができた。このような投機ブームはその後オランダでは発生していないので、この出来事は特筆に値する。
1630年	パロット咲きチューリップ、初めて描かれる。
1650年	ヴォールヘルム社、ハーレムに設立される。
1651年	F・モリンの記したチューリップに関する記録、パリで出版される。
1661年	ブランデンブルグの選定侯、植物調査一覧書に126種類のチューリップを記録。
1700～ 1730年	トルコでチューリップ時代が出現。大のチューリップ・マニア、モハメド・ラリザリはこの時期にオランダからトルコに数千個の球根を輸入した。

18世紀	ヒヤシンスの人気のチューリップよりも高まる。1730年頃にはちょっとしたヒヤシンス投機が起こる。
1730年～ 1740年	マルフラーヴェ・ヴァン・バーテン・デュルラックがオランダの17社から球根を購入したことを記したカタログを発行。17社のうち15社はハーレムの会社であった。
1734年	ヒヤシンス投機が高まったため、ワエルモント氏とガエルグット氏のチューリップ投機に関する対話篇が再発行される。
1750年	チューリップ‘カイザーズクルーン’(現在もオランダで2.3ヘクタールほど栽培)が導入される。
19世紀	栽培地、拡大される。当初、オヴァーヴェーン、ブルーメンダール方面へ、そして19世紀後半にはヒレホム、リッセ、ノールトウェイク方面へ。チューリップは「その他の鱗茎、塊茎」に分類され、ヒヤシンスのみが「鱗茎」とされた。
1815年	チューリップの品種‘コーレアカーディナル’(現在もオランダで23ヘクタールほど栽培)が導入される。この品種から、‘アルマ’(44ヘクタール)、『プリンセス・イレーネ’(72ヘクタール)などの品種が生まれた。
1849年	J・B・ヴァン・ダー・ショート氏アメリカにわたった最初の巡回球根セールスマンとなる。オランダから米国への球根輸出は18世紀から始まっていた。
1860年	芳香性の高いチューリップ、‘プリンス・バン・オーステンレイク’及び八重早生のチューリップ、‘マリロ’が導入される。
1872年	P・L・グラエバーを通じ、T・グレイギーが発見される。球根はC・G・ヴァン・トウーベルゲンに送られ、その移入が確認される。
187?年	E・R・レーガル、カウフマニアナ・チューリップを描く。
1889年	ダーウィンチューリップ、導入される。1898年には‘バーチゴン’も、これらのチューリップはその後、最も一般的な栽培種となる。
1914年～ 1915年	「チューリップ分類リスト」が初めて登場。開花時期、花形、花の縞模様や斑点などにより分類。
1928年	ホルタス・ブルボルム、設立。
1943年	チューリップに害を与えるウイルスについての最初の専門書が出版される。症状の写真付き。
1943年	D・W・レフェバー、交配により巨大な赤いチューリップを誕生させる。ダーウィン・ハイブリッドと呼ばれるこれらの品種の中で最も有名なものが‘アベルドーン’。
1960年	西欧におけるチューリップの歴史400年経過を記念し、トルコからオランダまで馬車を走らせた周年行事が行われる。
1977年	低温保存により、チューリップの発育を遅らせたアイス・チューリップが登場。これにより、従来チューリップの切り花が市場に出回らなかった時期でもチューリップの入手が可能になった。

(参考/オランダ国際球根協会資料より)

チューリップ四季彩館
からのお知らせ

●夏季特別企画展〈予告〉

藤城清治の世界展
—光と影の詩人—

日 時：7／24(土)～8／29(日)

会 場：チューリップ四季彩館ホール



▲春のデュエット



チューリップ四季彩館
TONAMI TULIP GALLERY

2004年5月発行

(財)砺波市花と緑の財団 〒939-1381 富山県砺波市中村100番地の1

TEL 0763-33-7716・FAX 0763-33-0090

URL <http://www.tulipfair.or.jp/>